

平成26年度 学校自己評価表

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。	今年度の重点目標	1 主体的学習者の育成 2 積極的な活動の創成 3 キャリア教育の充実 4 広報連携力の更なる強化 5 定時制教育の充実
-------------------	---	----------	--

評価項目		年度当初		評価結果(中間評価)		評価結果(最終評価)				
		目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	改善方策	経過・達成状況	来年度への改善方策		
1. 主体的学習者の育成 (企画推進・活動創成)	文武両道と規律ある生活による自立の促進	・生徒自身の学びが内発的なものとなり、日々の学習が緊張感と落ち着きの中すすめられている。 ・学校生活が品位ある言動に満ち、生徒は環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・生徒全員が部活動に加入し、学習との両立のなかで、部活動が主体的、積極的な活動となっている。 ・教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性のある指導ができる。	・多くの生徒が落ち着いた態度で学習に取り組んでいるが、指示がない学習に取り組めない指示待ち型の生徒が多い。 ・挨拶に象徴されるように礼儀正しく節度ある行動を取れる生徒が多いが、清掃や携帯電話の使用などの面で幼さの残る生徒も見られる。 ・部活動への加入率は96.7%と高く、活動内容や部室の使用状況も改善されてきたが、学習との両立ができていない生徒が見受けられる。 ・分掌にとらわれず、協働の精神を自ら実践しようとする教職員が増えてきた。	・65分授業やアクティブラーニングを活用して、生徒に学びの目的や楽しさを理解させ、自主的に学習に取り組む意欲を喚起する。 ・利己的な言動の見られる生徒に対しては毅然とした指導を行い、保護者と協力しながら、集団の中の個を意識させ、自分の言動が周囲にどんな影響を与えるのかを機会を捉えて深く考えさせる。 ・開始・終了時刻を含めたけじめのある部活動を目指すとともに、学習不振者に対しては部顧問も担任や教科担当と協力しながら指導にあたる。 ・学年会・分掌部会・教科会・主任会が報告だけでなく、課題を共有し、様々な立場から解決のための意見を出し合える場となるように努める。	・アクティブラーニングを取り入れた授業も次第に定着し、生徒も活動の内容を理解し、積極的に参加できるようになってきた。 ・提出物の質の向上や期限の厳守などの指導を通して、多くの生徒に改善の兆しが見られる一方で、依然として幼さ・甘さの残る生徒も見られる。 ・部活動終了後も自主練習と称して、遅くまで練習を続ける生徒がいるが、その中には学習との両立ができていない生徒も多い。 ・各学年・分掌内では、協働的に動こうとする教職員が増え、活発で建設的な議論や円滑な業務の遂行のための協力体制などが見られるようになってきた。	C	・アクティブラーニング自体が目的化しないよう、その狙いを再確認し、さらに質の高いものとなるよう学校全体・教科などで研究・協議を深める。 ・担任や教科担当の指導を継続するとともに、保護者や部顧問とも協力し多角的な指導を行う。 ・部顧問は、下校指導と家庭学習の定着・充実に向けての指導を行う。 ・今後は、学年・分掌の枠を超えて業務を行えるよう、広い視野と率先垂範の精神をさらに定着させる。	・アクティブラーニングも充実し、生徒の授業に対する評価も高い。一部に依然として指示待ち型の学習から脱却できない生徒も見られるが、3年生を中心に自主的・自発的な学習を行える生徒が増えてきた。 ・担任・教科担当・部顧問など様々な角度から生徒への指導を行い、多くの生徒が規律ある生活を行えるようになってきた。 ・開始・終了に加え、下校状況も改善されてきた。また日々の部活指導の中で、折に触れて学習の重要性や個々の改善点について話をせらう機会が増え、多くの生徒が学習との両立に努めようとしている。 ・協働の精神に基づいて円滑な業務が行われるようになったが、まだ十分とは言えず、業務の偏りの見られる学年・分掌もある。	B	・引き続き教職員を先進校視察等の研修に派遣し、アクティブラーニングを充実させる。 ・生徒に背伸びやジャンプさせることのできる教材や設問の工夫を行う。 ・教科ごとの授業スタイルの東高モデルを策定し、来年度より実施できる準備を整えることでPDCAサイクルを機能させ、一教師の力量に頼らない同僚性を高める。 ・アクティブラーニングを充実させるためには、知識の定着が不可欠であり、教職員・生徒ともに個別学習や暗記といった準備の必要性を再認識する。 ・各教科で効果的な基礎知識定着方法を検討する。 ・「予復習を進んで行い」、「自発的な学習に取り組む」その結果「学力の向上が実感できる」生徒が増えるよう、アンケートの分析を行うと共に、各教科でアクティブラーニングに関する総括を行う。
	「土曜日授業」「1授業単位65分」を活用しながら、「アクティブラーニング」の研究実践の進展・充実	・昨年度研究推進してきた「アクティブラーニング」の考えを発展させ、教職員研修の成果が日々の学習指導を通じて、生徒に還元されている。 ・生徒の学びがテストや大学受験といった実利的目的にとどまらず、真理探究や社会貢献といった高次な目標に向かうものとなっている。さらに、生涯にわたる学びの意義や教科の魅力を理解し、学習が内発的・主体的なものとなっている。	・「アクティブラーニング」の目的や効果をも多くの教職員が理解し実践しているが、授業の中での効果的な実践方法についてはまだ模索中である。 ・「土曜日授業」「1授業単位65分」を活用しながら、「アクティブラーニング」の研究実践の進展・充実	・校内研修や研究授業等を通して「アクティブラーニング」に関する知識や技術を全ての教職員が習得するとともに、65分授業に合う東高独自の授業スタイルについて科内で検討し、モデルとなる方法を策定する。 【校内理論研修①…5月15日 講師 香山真一氏】 【校内理論研修②…9月4・5日 講師 齊藤萌木氏】 ・校外理論研修や校外教職員との交流を通じて、指導力・実践力の向上を図る。 【県主催研修…年間5回 国語・数学・英語・地歴・理科・保健】 【校外教職員との交流…国語・英語・保健体育】 ・より質の高い「アクティブラーニング」を通じて、主体的な学びの楽しさや価値をより多くの生徒に体感させることで、生徒の内発性・主体性を促進し、その後の学習活動につなげていくことができるような授業を実践する。	・校内理論研修2回と県主催の理論研修4回は予定通り実施し、職員協議後の教職員研修でフィードバックしている。特に2回目の校内理論研修では、数学と英語の研究授業を併せて行い、講師から直接授業改善のアドバイスを受けることができた。今後は、県外の先進校視察、各教科で県外教職員との交流を行う。 ・東高独自のアクティブラーニング授業のスタイルについては、一つの手法にこだわらず、多様な方法を模索中である。 ・多くの生徒がアクティブラーニング自体は楽しみ、積極的に参加しているが、授業アンケートの結果では、「発展的な内容を自主的に学習する」「さらなる学習意欲がわく」「定期考査や模試から、学力がついてきていると感じている」生徒は減少している(前年度比較)。知識の定着という観点では、後退した。 ・各教科が授業ごとの確認テストを実施したり、生徒に解ける実感を持たせることや、家庭学習の具体的指示の必要性が強くなってきている。	B	・年度内に各教科の授業スタイルを策定し、来年度からの実施を目指す。 ・ALは生徒の多様性を生かす思考、判断する活動を通して、知識理解と表現力を深める学習であり、知識の定着を超えた次の段階に重きを置く授業形態である。従って、基礎知識の反復による定着は生徒の家庭学習に任せることが大きい。よって、生徒にアクティブラーニングの狙いと、アクティブラーニングの成功には自主的な取組みの充実が不可欠であることを理解させる。 ・知識の定着に関して、小テスト、確認テスト等の記述する場面を授業に入れる工夫を進めると共に、生徒に対して自分一人で学習し、演習を繰り返す重要性を指導していく。 ・授業アンケートを各教科で分析し、授業の改善に努めるとともに、上記の授業スタイルにも反映させる。	・後期授業評価アンケートの結果、90%の生徒が「授業に教合いや意見交換など、言語活動を通して課題を解決する場面がある」と答えており、前年度から高い水準で推移している。特に、小ボードを活用して班ごとの意見をまとめたり、タイマーを各教室に常備し、ペアワークに使用したりと先進校視察で吸収した工夫が授業で実践されている。 ・「定期考査や模試から、学力がついてきていると感じている」生徒も前期より6%増加し、各教科で授業の工夫と合わせて「考査や模試等の問題の難易度を検討してもらった結果ポイントがアップした」。 ・11月の後期中間考査直後に実施した家庭学習調査では、前回(夏休み直後)に比べて1年生が+21分、2年生が+40分であった。しかし、「授業の振り返りを通して自分の課題を明確にし、予復習を進んで行っている」生徒が前年度に比べて-4%であり、前年度より増えた教科は英語のみであった。また、「授業から発展した内容を自発的に学習している」生徒が-5%で、いずれもアクティブラーニングの目的となる部分であり原因の究明と対策の実行が必要である。 ・学校評価アンケートでは、「アクティブラーニング、65分授業、土曜日活用は効果がある」と答えた生徒は67%、保護者は82%であった。 ・教科によっては、授業の節目で単元テストを行い生徒に刺激を与えている。	B	・引き続き教職員を先進校視察等の研修に派遣し、アクティブラーニングを充実させる。 ・生徒に背伸びやジャンプさせることのできる教材や設問の工夫を行う。 ・教科ごとの授業スタイルの東高モデルを策定し、来年度より実施できる準備を整えることでPDCAサイクルを機能させ、一教師の力量に頼らない同僚性を高める。 ・アクティブラーニングを充実させるためには、知識の定着が不可欠であり、教職員・生徒ともに個別学習や暗記といった準備の必要性を再認識する。 ・各教科で効果的な基礎知識定着方法を検討する。 ・「予復習を進んで行い」、「自発的な学習に取り組む」その結果「学力の向上が実感できる」生徒が増えるよう、アンケートの分析を行うと共に、各教科でアクティブラーニングに関する総括を行う。
2. キャリア教育の充実(キャリア形成)	OJTの充実と進路指導力の向上 ※OJT・オン・ザ・ジョブ・トレーニング	・全教職員が「倉吉東高校のかたち」に基づいて、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の意識が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと向けられるような生き方指導を行っている。 ・全教職員が進路指導に関する適切な知識や技能を習得し、3年間のどの段階においても、適切な指導を行っている。	・多くの生徒が視野を広げ、適切な進路目標を立てているが、意識が社会貢献に向けられない生徒や進路選択に対して消極的な生徒も一部見受けられる。 ・3年生進路検討会への参加者は多いが、1・2年生進路判定会の参加者は少なく、学年の枠を超えて進路指導の知識や技能が十分に共有できているとは言えない。低学年からの進路指導におけるスキルアップが必要な状況である。	・全教職員が授業や進路指導だけでなく様々な場面を通して、「倉吉東高校のかたち」の理念の生徒・保護者への浸透を心がけ、生徒が受験を通して自らを高め、社会にかかわろうとする意識が高まるよう取り組む。 ・1・2年生の進路学習の充実及び改善を行い、社会貢献の観点に基づき、幅広い進路選択の中から自らの進路が決定できるよう取り組む。 ・教職員研修での積極的な意見交換を促すほか、教職員一人ひとりが日々の取組を通して進路指導に関する情報を受発信できるよう努める。 ・3年担任団だけでなく、分掌と1・2年生担任団との連携を一層すす、生徒個々のキャリア形成に役立つ情報を共有するとともに、生徒が適切な進路志望がもてるよう取り組む。	・生徒には学年集会や講演会、保護者には育友会総会や刊行物などを通じて、キャリア形成における高校生活の重要性を説いている。「進路のしおり」の原稿を親子で執筆していただき、保護者としてのサポートがわかるようになった。 ・進路学習の年間計画を明示し、担任団と連携して取組み、単なる学校選びとならないように工夫した。1・2年生ともに、学部学科調べを行った。 ・新旧3年担任会の参加者37名、3年生進路判定会の参加者43名。例年よりも多くの教職員が参加し、教職員研修の場として機能を果たしている。 ・キャリア部員が各学年の担任会に参加し、情報共有を行うようなことがけた	B	・今後は講演会やHPなどを通じて、積極的に校内外への発信を行い、生徒・保護者の進路意識の向上に努める。また、学年集会や面談を通じて、担任団と協力しながら、生徒が適切な進路意識をもてるように努める。 ・1年生では文理選択に合わせた受験科目調べ、2年生では学部学科調べを本格化させ、自分の進路を主体的に考える機会を通して確かな進路選択ができるようにするとともに、社会とのつながりを意識させる。 ・3年生進路判定会(12・1月)、1・2年生進路検討会(2月)においても、参加者から多くの助言を得て、さまざまな観点から生徒の可能性を生かした進路指導を行う。	・1年生は文理選択に伴う受験科目調べ、2年生の学部学科調べともに生徒はきちんと取り組んだ。特に、講演会や学部学科説明会において、積極的に講師に質問する生徒が例年以上にあり、自分の進路を主体的に考えようとする生徒が増えており、「未来・社会」へは向いてきているが、「貢献」の面では改善の余地がある。 ・「倉吉東高のかたち」については学年進んで理解が深まっているが、今年度は理解の割合がやや下がっている。 ・進路講演会や学部学科説明会などの進路行事の様子をHPに積極的に掲載し、キャリア形成に向けての学校の取組を保護者に伝えるようにした。 ・3年生進路判定会(12月)の参加者は46名。出願判定会議(1月)は43名。スキルを高めるための研修の一環という意識が定着してきている。1・2年生の進路判定会議は2月に実施予定。	A	・「倉吉東高のかたち」にある21世紀をリードする人材の育成とキャリア形成とのつながりを、進路学習や講演会などを通じて生徒・保護者に積極的に伝える。 ・進路学習が生徒が主体的に自分の進路を考える機会となるよう、内容面での工夫を一層行うとともに、社会貢献との結びつきを意識した方向で行う。また、大学の先生と連携した学部学科説明会については、大学での学びをイメージしやすいことから来年度も継続する。 ・3年生進路判定会については、一定数の教職員の参加が定着したが、より多くの先生方から助言が得られるようにしたい。1・2年生の進路検討会においても多くの先生方の参加を促し、低学年からの指導のノウハウを継承する。
	中堅・難関大学合格者の数の発展	・中部地区を代表する進学校として、生徒・保護者・中学校などからの期待にふさわしい実績を維持し、さらなる向上が期待できる。 ・国公立大学現役合格者数125名以上。 ・中堅・難関大学合格者の数の発展	【国公立大学現役合格者数】 H23年度145名 H24年度140名 H25年度120名 ※H25年度より5クラス 【中堅国公立大学以上現浪合格者数】 H23年度66名 H24年度52名 H25年度49名 【難関大学現浪合格者数】 H23年度21名 H24年度21名 H25年度25名 【東京大学現浪合格者数】 H23年度3名 H24年度2名 H25年度1名	・1年次から志望校指導を行い、3学年を通じて適切な進路目標を設定させる。 ・国数英の基礎力を定着させるために、1年次における学習習慣の確立を意識した初期指導を充実させる。 ・各生徒が、志望校の検討と同時に、自らの学習法を点検し、苦手科目を克服することにより、3年次には全ての生徒にCTに対応できる学力を保障する。 ・各成績層の成績推移を確認し、成績結果に応じた適切な指導を行い、学力中位層以上が厚くなるように努める。 ・新学習指導要領に基づくセンター試験や2次試験への対応を各教科に促し、生徒の進路実現に必要な学力の育成を図る。 ・二次試験に必要な力をつけるために、補習授業や課外の内容を精選するとともに、志望校別のグループを作り、互いに切磋琢磨する集団作りに取り組む。 ・卒業生に接したり、県内外での難関大合宿などに参加することで、目標達成の意欲を高め、具体的な方策が得られるよう指導する。 ・東大志望者のチーム力を高めるとともに、三校合同講座などを通して校外からも刺激を受けながら、模試や補習授業・課外などで具体的な指導を行う。	・各学年ともに概ね適切な志望校となっているが、志望に見合った学力の育成が課題となっている。特に、1・2年生においては、学習時間の少ない生徒がいることから、面談等を通じて、進路目標に見合った自宅での学習量となるよう指導している。 ・3年生においては中上位層が厚く、今後に期待がもてる。一方で、1・2年生では中位層が減少傾向にある。 ・理系科目を中心に、新教育課程に係る研究会に参加し、対策等を学び、指導に生かしている。 ・放課後課外における2次課外においては、細やかな指導ができるよう例年よりも細分化された講座を開講している。 ・大山学習合宿によるOBの指導、1・2年生学術クラスの生徒と難関校OBとの懇談会を行い、卒業生から良い刺激を受けた。 ・三校合同東京大学対策講座への参加者は20名あり、他校の生徒と切磋琢磨しながら良い刺激を受けている。放課後課外でも難関大向けの講座を開講しており、ほぼ同じメンバーが参加している。	C	・志望校判定会などを通じて、担任団との情報交換により、今後も適切な進路志望がもてるよう努める。 ・学習習慣の確立や学習時間の確保については、各教科が立てた対策を着実に実行するとともに、担任・教科担当者等による面談を通じて、進路目標の確認や学びの意義の自覚による学習量の増加を図る。 ・今後は個別指導を加えたり、CT試験以降の特別課外により効果的なものになるよう工夫する。 ・今後も新教育課程に係る研修に積極的に参加することにより、生徒への還元を図る。 ・今後県外での難関校合宿(2年生)に参加予定。首都圏研修や研修旅行における大学訪問等などを通じてより高い進路意識をもたせる。廃止された県内難関校合宿については代替案を検討する。 ・3年生については今後個別指導等を通じてよりチーム化を図るとともに、1・2年生については東大志望者の意識付けを学年代階に応じて行う。	・国公立大学現役合格者数は目標を上回る見込み。中堅大学以上及び難関大学への合格者数は昨年度を上回る見込みだが、中堅大学以上の合格者数は目標を下回る予想。(入試結果については後日記入) ・担任団との連携を図るとともに、生徒が適切な志望校がもてるよう進路学習、講演会などを行った。 ・学習習慣の育成に向けて、学年集会をタイムリーに行ったり、教科担当者による面談を行い、学びの意義等を生徒に伝える機会をもった。その結果、1・2年生ともに学力面で回復傾向が見られるが、1年生については上位者の育成に課題が残っている。3年生の学力については順調に推移した。 ・年間を通じて、先進校視察や予備校派遣を行い、新課程に関する情報を得て、教科指導に生かした。 ・3年生の放課後課外及び2次試験対策課外ともにグレード別に実施し、細やかな指導を心がけた。単なる指導に留まらず、添削と連携させる科目もあり、成果をあげた。 ・2年生は県外難関校合宿に8名が参加、その後の県外セミナーにも9名が参加し、難関校受験に対して意識付けができてつある。1年生については、代替の方策を年度末に実施する予定。 ・3年生は、2次課外や3校合同東大対策講座により、生徒のチーム化が進んだ。特に、3校合同東大対策講座については、他校との切磋琢磨の中で生徒は力をつけていった。	B	・中堅大学以上の国公立大学への合格者数を増やすために、今まで低学年からの基礎・基本的事項の習得や活用する力の充実を図るとともに、3年次における実戦力の育成について検討する。 ・1・2年生については、適切な志望校をもつとともに、その志望校に向けた学力が育成できるように、今後も指導を継続する。特に、3年生の成績が順調に推移したことから、そのノウハウを他の学年が継承できるようにする。 ・今年度の3年生の成績や2次試験等を分析しながら、新課程完全実施となる次年度入試に向けた対策を検討するとともに、今後も研修の機会を得て生徒に還元する。 ・放課後課外や2次試験対策課外のグレード別での実施は、効果があることから来年度も実施する。 ・県が実施していた1・2年生難関校合宿の代替案については、予備校派遣や校内での実施など、早急に対策を検討し、1・2年生が難関校に向けた意識を継続できるようにする。 ・3校合同東京大学対策講座は生徒からの評価も高く、来年度も実施するとともに、他校との連携を強め、指導のノウハウの共有と講座内容の改善ができるようにする。

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策	経過・達成状況	評価	来年度への改善方策
3. 積極的な活動の創成(活動創成)	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等・育成したい生徒像の具体化	・全ての生徒が自らのリーダーシップを自覚し、創造的な態度で生活している。 ・生徒自身が社会に広く関心を持ち、社会的課題に対し当事者意識を持っている。 ・自分や社会の将来に希望を持ち、今現在という時に充実感を感じながら、真剣に日々の生活を送っている。	・リーダーの資質を持っている生徒は少ないが、それを自覚し発揮しようとする態度は不十分である。 ・社会的に逸脱した行動をとる場面はほとんど見られないが、その社会に疑いを持ち、よりよくしていくとする態度の育成が不十分である。 ・自己の能力を少しでも伸ばしていくとする生徒が多くいる中で、自らの理想と現実とのギャップに苦しみ、学校生活に消極的になっている生徒もいる。 ・概ね計画性をもって自らを律しながら生活できているが、将来への不安や見通しの悪さから、今現在を充実させきれない生徒がいる。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事、日常的な委員会活動を通して、リーダーシップを発動せざるをえない場面を数多く設定する。また、それらの行事が、本来目的としている領域に到達できるよう生徒の創造性を十分に発揮させる。 ・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、また日常生活においても、交通安全指導や服装指導を通し、自らと社会との密接な関わりを意識させる。 ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通してさまざまな失敗を経験させ、現実を堂々と受け止められる強さをはくぐむ。また、教育相談を充実させ、生活に消極的になった生徒に自分が出来ることを少しずつ達成させていくことによって、自分への自信を取り戻させる。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自らの手で計画、準備、運営させて行くことにより、今現在の充実が未来を切り拓く力につながっていくことを経験させる。また、そこで経験したことや学んだことを言語化する活動を通し、それからの日常生活に生かしていけるような力とする。	・今年度は、執行部に2年生も入れて活動を行った。自ら活動する中で、生徒会活動の楽しさや、問題点を感じ取ったようである。その2年生執行部のなかから、後期生徒会会長に4名、生徒副会長に3名の立候補者が出た。 ・交通マナーや公共施設でのマナーなど、校外における生徒の態度に問題が見られる。学園祭の活動においても、自分さえよければいいという態度が見られる部分もあり、周囲への配慮のできる生徒の育成という面で改善がもためられる。	B	・執行部として活動してきた2年生の問題意識を生かして、新執行部を中心に問題解消に向かって具体的な動きをする。また、引き続き1年生も執行部のメンバーとして一緒に活動させる。 ・生徒会執行部が主体となって、啓発活動を行う。また、教職員側からも学年団や他分掌と連携をとりながら、問題の発見的解消を目指す。 ・後期は大きな生徒会行事は少ないが、日々の委員会活動を通して自らの責任を果たす姿勢を求めていく。また、指導体制の工夫、活動時間の確保、予算面での支援によって、より一層部活動の活性化を図る。教育相談については、予防の視点に立ち、ストレスマネジメントについて生徒に理解させたい。 ・新執行部やフォーラム生徒実行委員会を中心に、来年度の学校行事のグランドデザインを描かせ、全校生徒と共有する。	・新執行部が発足し、活動を開始している。より創造的な活動を目指しながらも、その難しさにも直面しており、チームとして取り組むことによってそれを乗り越えようとしている。また、部活動や学校行事、LHRなどのクラス活動を通して、自らリーダーシップを発揮しようとする姿も見られる。 ・折に触れて呼びかけたことにより、改善傾向は見られるが、まだ校内校外で幼稚な態度を見せる生徒もいる。生徒会としての活動も計画中である。 ・日々の委員会活動や生徒会行事を通して、役割意識を持ち、学校全体の問題を自らの問題として考える生徒も見られるようになった。その反面、先生に言われたから、とか、決められているからという活動態度も見られる。部活動においては、クラブ活動助成費などを有効に使うことが出来た。放課後の活動時間について教職員の認識が統一出来ていない部分があった。ストレスマネジメントの具体的方策について他校の情報を集めながら検討している状況であり、来年度からの実施に向けて準備中である。 ・新しい学園祭実行委員会、フォーラム実行委員会を組織中である。	B	・あくまでも活動の主体を生徒としながら、教職員側から適切な助言を行い、創造的な活動に前向きに取り組ませることで、リーダーとしての成長を促す。 ・学年団や他分掌、生徒会と連携しながら、対処療法的な取り組みに陥ることなく、本質的な人格形成・成長を目指す。 ・委員会活動においては、教職員と委員という関係だけでなく、委員同士がつながるような活動を行う。部活動において、水曜日の放課後は部活動の時間という雰囲気を作る。 ・教育相談については、特に中学から引き継いだ新入生の情報を活用し、教職員間での情報共有を図る。また生徒自身に自己理解を深めてもらうために相談室提出用の個人票の内容を変更し、生徒自身によるストレスマネジメントにつなげる。 ・今年度の活動を振り返り、反省点をしっかりと踏まえ、今年度内に来年度のグランドデザインを描き、そこから逆算して活動計画を立てる中で、過去・現在・未来を俯瞰できる能力を養う。
4. 広報連携力の更なる強化(連携発信)	積極的な広報活動による地域や中学校からの共感の促進 育友会・同窓会との連携促進 新スクラム教育による中学校との連携並びに中高の円滑な接続	・地域の方や各中学校関係者に本校の教育方針・教育内容が十分理解され評価されている。 ・全教職員が本校の教育方針・教育内容について適切な説明をすることができる。 ・本校が各中学校の実態を十分理解しており、生活指導・学習指導等について、中学・高校の連続性がある。 ・中学教育を支援するため、本校が持つ教育資源を積極的に提供している。 ・本校の進路指導や大学の現状に対する保護者の理解が深い。	・本校の教育方針・教育内容について、中学校教職員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。 ・管理職だけでなく、多くの教職員が中学校訪問を行い、本校の教育について説明をしている。 ・HPの更新についても全職員で行い、学校の特色や魅力を発信しようとしている。 ・昨年度は倉吉東中学校と「スクラム教育推進事業」を行い、英語・数学における連携を深めているが、全教科・領域の連携に至っていない状況にあった。 ・「中学生英語ブラッシュアップ講座」を実施し、中学レベルを超えた英語力の育成を支援している。 ・要請があれば英語・音楽・体育の教職員派遣に応じている。 ・保護者に対しては、8月、2月の進路講演会の他、11月に大学見学会を実施して、情報提供を行っている。	・本校のHPをさらに充実させ、教育活動を適切に外部へ情報発信できるように努める。 ・学校案内を更新し、新鮮な情報を掲載して中学校への広報力を強化する。 ・中学生を対象とする高校説明会を充実させる。 ・中学校主催の説明会や進路学習の機会を利用して、教職員が積極的に中学校に出向き、本校への理解が深まるよう工夫する。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、キャリア形成部や企画推進部以外の教職員も行い、発信能力の向上に努める。 ・HPIに関する研修会を行い、能力と意欲の向上に努める。 ・倉吉東中学校、河北中学校との「英語スクラム教育推進事業」を充実させ、学校間の連携を密にする。また公開授業等を積極的に活用して、相互理解を深める。 ・「中学生英語ブラッシュアップ講座」への参加拡大を促進すると同時に、中学教職員の参加(参観、ティームティーチングなど)を呼びかける。 ・部活動でも中学と合同練習を行うなど、可能な範囲で交流を行う。 ・中学校出前授業に積極的に応じる。 ・保護者対象の進路講演会や大学見学会の参加者を増やし、内容を充実させる。	・HPの更新はほぼ適切に行われており、またネット commons 2 への更新に際して画面の再構成を行い利便性を高めた。 ・学校案内の写真、記事の年度更新を行い、鮮度の維持に努めた。 ・高校説明会では、本校のチューターによる中学生との座談会や施設見学を継続実施した。 ・中学校主催の説明会には、21名の教職員を派遣した。 ・学校訪問などの来校者への説明は、連携発信部や活動創成部など必要に応じた分掌担当者で対応した。 ・HPIに関する説明会は実施しておらず、プリント配布とネット上でのデータ提供に止まった。 ・今年度は「長文読解をベースにした言語活動による学力向上」をテーマに、河北中とは年8回、東中とは年6回の乗り入れ授業を行う予定である。 ・「英語ブラッシュアップ講座」は希望者が伸び悩んだが、最終的に昨年とほぼ同数の79名の参加となった。 ・今年度は、バレーボール部、バスケットボール部、ソフトボール部、バドミントン部、卓球部、剣道部、陸上部で中学校と合同練習や練習試合を行った。 ・今年度は11月19日(水)に、岡山大学を訪問する予定である。	B	・ネット commons 2 への更新が遅れたため、「再読み込み」を周知する時間があまり取れなかった。検索画面から「再読み込み」の情報を発信できるよう工夫した。 ・学校案内の更新や、体験入学でのチューター活用を今後も継続する。 ・今後も教職員の中学校派遣を継続する。 ・学校訪問などの来校者への説明は、連携発信部や活動創成部など必要に応じた分掌担当者で対応した。 ・職員会議後の教職員研修を通じて、HPの更新のスキルの上向上と情報発信の意義についての理解を求める。 ・学力向上を図ると共に、中学校でのCRT (Criterion Referenced Test)、NRT (Norm Referenced Test) などの学力検査を通じ、生徒の変化と成長を検証していく。 ・来年は中学校訪問説明会を通じて趣旨を説明し参加を呼びかける。中学校の担当者にも声をかける。 ・部活動顧問に対し、継続して中学校の部活との連携を呼びかけていく。 ・保護者に参加を呼びかけるとともに、ランチミーティングに参加可能な大学生の確保を急ぎに行う。ゆったりと話ができる時間と環境となるよう配慮する。	・HPの更新はほぼ適切に行われており、地域の方々や中学生に本校の教育活動をPRする役割を果たしている。また画面の再構成も行い、閲覧者に対する検索の利便性を高めた。 ・学校案内の写真、記事の年度更新を適切に行い、中学生の興味を引くものになった。 ・高校説明会では、本校のチューターの活用により、中学生に親しみやすいものになった。 ・中学校主催の説明会には、21名の教職員を派遣し、適切な説明を行った。 ・学校訪問などの来校者への説明は、連携発信部や活動創成部など必要に応じた分掌担当者で対応した。 ・HPIに関する説明会は実施しておらず、プリント配布とネット上でのデータ提供に止まった。 ・今年度は「長文読解をベースにした言語活動による学力向上」をテーマに、河北中と東中への乗り入れ授業は、ほぼ予定通りに行い中学校との連携を深めた。 ・「英語ブラッシュアップ講座」は希望者が伸び悩んだが、最終的に昨年とほぼ同数の79名の参加となった。 ・今年度は、バレーボール部、バスケットボール部、ソフトボール部、バドミントン部、卓球部、剣道部、陸上部で中学校と合同練習や練習試合を行い、中高の連携を深めた。 ・今年度は11月19日(水)に、岡山大学を訪問した。保護者の参加は39名であった。本校OB・OGの大学生12名の協力を得て、充実した説明会となった。	A	・画面構成や書式の統一感をもたすために教職員研修を実施し、マニュアルの改善を行う。 ・学校案内の更新や、体験入学でのチューター活用を今後も継続する。 ・今後も教職員の中学校派遣を継続する。 ・今後も来校者のニーズに合わせた人選を行う。 ・教職員研修を通じて、HPの更新のスキルの上向上と情報発信の意義についての理解を求める。 ・今後も学力向上を図ると共に、中学校でのCRT、NRTなどの学力検査を通じ、生徒の変化と成長を検証してゆく。 ・来年は中学校訪問説明会を通じて趣旨を説明し参加を呼びかける。中学校の担当者にも声をかける。 ・部活動顧問に対し、継続して中学校の部活との連携を呼びかけていく。 ・大学生とのミーティングの方法について検討し、ゆったりと話ができる環境を作れるよう工夫する。また参加可能な大学生の確保に努力する。
5. 定時制教育の充実(定時制)	授業規律の向上と授業改善による学力の向上 積極的な生徒指導	・授業規律を守って意欲的に学習に取り組むとともに、自己の進路目標達成に向けて努力している。 ・わかりやすい授業と個々の生徒の実態に応じたきめ細かな指導を行うことで、学力の向上を図る。	・携帯電話やスマートフォンが気になり授業に集中できなかつたり、教室の後ろの席に座つて学習に意欲的に取り組めない生徒が一部見られる。 ・基礎的な学力や学習習慣が十分に身についていないために理解するのに時間がかかる生徒が多い。また、レポート等を計画的に取り組むことが難しい生徒もいる。	・授業規律について、年度当初から生徒・教職員で共通理解を図り実践する。 ・ハローワークやキャリアアドバイザー(CA)との連携を密にし、正規採用に向けて職場訪問や書類作成・面接指導等を計画的に行う。 ・面接や声かけなどを効果的に言い、安易な欠席や欠課を減らすとともに、レポートの未提出を防ぐ。 ・全教職員が授業公開・授業評価を実施し、授業改善や指導方法の向上を図る。 ・先進校視察を継続し、基礎基本の定着や人間関係づくりについて本校なりの方法を工夫して実践する。 ・面接や家庭訪問等あらゆる機会を捉えて生徒一人ひとりのおかれている生活環境や生育歴等を把握し、SCやSSWr等と連携してきめ細かな指導を行う。 ・生徒会活動や学校行事等で生徒が主体的に取り組む仕掛けを工夫し、生徒の活動を活性化させ、連帯感や達成感を持たせる。 ・早期に研修先や内容を検討し、研修の狙いが十分に達成できる計画を立案するとともに、研修前及び研修後も進路意識や勤労観を涵養する取り組みを工夫する。	・授業規律について、座席や学習用具の準備は改善された。携帯電話やスマートホンの使用については、今年度新たにルール作りをして指導しているが、一部の生徒の継続指導が必要である。 ・進学希望者は6名。大学2名、短大3名、専門学校1名。学校訪問やオープンキャンパスに積極的に参加し、個々の進学先に向けた受験準備を行っている。 ・就職希望者は8名。昨年度より正規採用を目指す生徒が増えている。3年団をはじめCA等と連携して、応募前見学や志望理由書作成・面接練習を継続しているが、まだ未決定の生徒も多い。 ・前期授業評価では、生徒の学習への取組について評価が良くなっている。授業公開・参観があまりできなかった。 ・時間を有効に活用した基礎学習の取り組みが軌道に乗ってきた。 ・毎日情報交換を行うことで、生徒の様子を素早く共有するとともに、レポートの未提出も早期に把握でき、個別の声掛けができるようになった。 ・担任、学年団、養護教諭、SCの面談に加え、今年度から配置されたSSWrと連携することで生徒の家庭状況等の情報共有ができて、生徒指導に役立っている。 ・定通高校総体では卓球やバドミントンで全国大会に出場し、囲碁部門でも高文連や高校囲碁選手権等の大会で活躍した。また、生徒会が中心となって七夕祭などの行事ができた。 ・早期に新しい首都圏研修先を決定し、現在は班別研修を含めた全体計画を検討している。	B	・携帯電話やスマートホンの使用については、今後も教職員間で連携して指導を継続する。 ・進学希望先に合わせた個別指導を継続する。まだ就職先が未決定の生徒がいるので、CAや進路担当者等と連携して就職先を検討するとともに、卒業に向けた指導も継続する。 ・授業改善の一環として授業参観等を行ったが、前期は少なかつた。後期は、先進校視察の報告を生かしたり、授業公開・授業参観の機会を増やし、基礎学力の習得を含めた授業方法の工夫を図る。 ・基礎学習の内容や教材等を工夫して、生徒のやる気を高める指導を行う。 ・集会の集合や挨拶など良いところは褒め、頭髪や言葉づかい、掃除など指導すべきことは共通理解して指導に当たら。 ・面接や関係機関との連携を密にして生徒理解・情報共有に努めるとともに、様々な悩みを抱えている生徒の個別指導を継続する。 ・県生連大会や生活体験作文に取り組みとともに、クリスマス会や球技会など、生徒が主体的に取り組む仕掛けを工夫して生徒会活動を活性化させる。 ・首都圏研修では、班別研修の具体的な内容をさらに検討し、事前学習を深めていく。	・授業規律について年度当初から教職員・生徒で共通理解を図って取組み改善された。携帯電話やスマートホンの使用については、今年度新たにルール作りをして指導しているが、一部の生徒には継続指導が必要である。 ・学校紹介で正規採用を目指す生徒が増えた。進学希望者は課外や個別指導、オープンキャンパス等に積極的に参加し、私立大学2名、短大2名、専門学校1名が決定するなど、進路目標達成に向けて努力する生徒が増えた。 ・先進校視察を行い、人間関係づくりやつまずきの解消に向けた取組について報告会を持って教職員間の共有を図った。公開授業を活用した指導方法の研究はまだ少ない。 ・現在後期の授業アンケートを行っている。前期や昨年度結果と比較して対応をまとめ、年度末までに共有する。 ・テキスト等を活用した基礎学習の取り組みが定着し、生徒は計画的に取り組めるようになった。 ・生徒の取組状況を素早く把握するため情報交換を毎日行い、迅速な対応でレポートの提出状況が向上した。 ・全校集会の集合など、時間を守る行動ができるようになった。 ・頭髪やピアス等については引き続き指導を行う。 ・SSWrやSCと連携して要保護児童対策地域協議会や個別支援会議、ケース会議を持ち、生徒理解・生徒対応をしている。また、SSWrは、市の福祉課など外部との連携を深めることにより指導の幅が広がった。 ・定通高校総体や県生連大会、生徒のアイディアを生かしたクリスマス会等を開催した。文集作りや切り絵作成など生徒が意欲的に取り組む場面が増えた。 ・昨年の反省を元に見学先やスケジュールを改善して研修を実施できた。きまりより研修を行い、貴重な経験ができた。	A	・授業規律や携帯電話・スマートホンの使用について、年度当初から生徒・教職員が共通理解を図り、継続して取り組む。 ・各学年に応じた進路指導を、CAやハローワーク等とも連携して計画的に実施する。特に、3年次生には正規採用を目指す指導を行う。進学希望者にも、早い段階から課外や受験準備を行う。 ・卒業生との座談会や進路講演会など効果の高かった取組を継続し、進路意識の向上を図る。 ・意欲的に授業に取り組めるように授業研究に努め、学習方法や評価等を工夫する。また、今年蓄積した基礎学習の資料をもとに、来年度はより計画的な取組になるように工夫する。 ・家庭連絡や職場訪問を行うことで、生徒の実態把握と保護者と連携を深め、個に応じた指導の充実を図る。また、退学者・休学者を減らすために、SSWrやSC、CAを含めた教職員間の情報交換を密にし、共通理解を図って粘り強い指導を継続する。 ・基礎基本の定着や人間関係づくりにおいて、先進校視察で学んだ「ピアサポート力の育成」や「基礎基本の定着」などの手法について、本校なりの方法を工夫し実践する。 ・生徒が主体的に取り組む仕掛けづくりを工夫し、連帯感や達成感を持たせて生徒会活動をより活性化させる。 ・2年次生首都圏研修の見学先や内容を更に検討し、事前学習を深めてより効果を高める。

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80％以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60％～80％の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40％～60％の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40％未満である。